

二次元ぷち文庫

試し読み版

鉄機神 ゴレビツオン

上田ながの
表紙イラスト: びりしや



当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『鉄機神ゴルバリオン』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



鉄機神
ゴビツホン

上田ながの
表紙／みりしゃ

二次元ぶち文庫

登場人物紹介

Characters

えんざん

炎山マリカ

対侵略者部隊「インベード」にて、鉄機神ゴルバリオンに乗って「カントリー」と呼ばれる組織と闘う少女。正義感が強く、人々を守るために出撃する。

ひやま しょうざん

氷山 正山

「インベード」の創設者にして、ゴルバリオンの開発者。

カントリー

インベードと敵対する組織。その目的とは……？

『戦え！ ゴルバリオン』

♪乙女の涙が心を揺らす、目覚めよ、目覚めよ鋼鉄の巨神！

♪唸る鉄拳が大地を引き裂く、ゴッゴッゴオオオンッ！

♪走る閃光が敵を消し去る、バリバリバリインッ！

♪迫りくる悪の影、僕らの地球が危ない！

♪渡すもんか渡すものか、宇宙に一つの青い星を！

♪立ち上がれ、熱い心に炎を燃やせ

♪僕らの地球を守るもの、みんなの命を救うもの

♪その名は、その名は！

♪ゴ〜ルバリ〜オ〜ン〜！ ゴルバリオオオオンッ！！

鉄機神ひやましようざんゴルバリオンは日本侵略を狙う悪の組織「カントリー」から、日本を守る為に氷山ひやましようざん正山博士が造り出した身長五十七メートル、体重五百五十トンの巨大ロボットである。エネルギー源は純潔な人間が持つオーガニック的なエネルギーである、ヴァージニックエネルギーを採用。これにより通常兵器を遥かに凌ぐ力を発揮することが可能だが、その副産物としてパイロットは純潔の乙女に限られる。

日本の為にゴルバリオンに敗北は許されない。

紅蓮のボディに怒りを込めて――。

戦えゴルバリオン！ 負けるなゴルバリオン！ 僕らの未来は君の手に掛かっている！

*

「こんな……こんなことって……」

ゴルバリオンのコックピット。一人がやつと入れるだけの空間で、一人の少女――
 炎山えんざんマリカがモニター映像を見つめながら呆然ぼうぜんと呟いた。

映し出されるのは、炎に包まれる都心の光景。崩れ落ちたビルに、逃げ惑う人々の姿だった。噴き上がる黒煙が空を覆う。まるで地獄のような光景だった。

「許さない。絶対に許さないっ！」

ガツンッとコンソールを叩く。吐き出される氣勢。同時に都心を炎の海に沈めた敵機を睨みつける。

黒い十字架のような形をした敵。大きさはゴルバリオンの半分ほどしかないが、空中を飛び、三機で編隊を組んでいる。空を飛ぶことができない鉄機神にとってはかなり厄介な相手ともいえた。

だが、そんな程度の不利で引くことなど有り得ない。

「私は守る。この街を守ってみせる！」

操縦桿を強く握り締め、それを一気に引いた。コックピットからの指令に、ビコンッと

7

巨神の両目が輝きを放つ。

「喰らえッ！ ゴルバリックレーザー！」

マリカの叫びが木霊する。レバーと音声により、武器のセーフティーが解除され――。

シュバアアアアアアッ！ ドグアッ！

ゴルバリオンの両目から紫色の閃光が迸り、一撃で一機を撃破する。轟く爆音。爆炎が空中に広がっていく。

仲間が撃墜されたことにより、残った二体が赤いレーザーのようなものを照射してくる。

「チッ！」

舌打ちをし、攻撃を回避しようとするが、巨大過ぎる機体に過度な運動性は期待できない。実際身を振よじっている間に、レーザーは巨神へと直撃した。

「そんな程度！」

とはいえ、ダメージはまったくくない。ゴルバリオンの一万二千枚の特殊装甲を打ち破るだけの力はないようだ。

「こいつっ！ ミサイルッ！」

この機を逃さんと、胸部装甲を開き、ゴルバリオンミサイルを一斉発射する。飛び散る弾幕が、敵はこれらの攻撃を尽く回避していった。サイズが小さい分、小回りが利く。

ビビビッ！

回避と同時に再び放たれるレーザー。当然の如く命中するが、やはりダメージはない。

「だから……効かないっていつてるのよ！」

叫ぶと共に、巨神の腕を空中へと向ける。

「喰らいなさい！ ゴルバリックプレッシャーマグナムッ！」

ドンッ！

撃ち放たれたのは、ゴルバリオンの巨大な右腕だった。肘から先が、宙を舞う十字架へと突き進む。対する敵は当然のように回避行動に移るが、

「逃がさないっての！」

敵の逃げ場を塞ぐように、再び弾幕を張る。これによって十字架は動きを封じられ――。

ドグオンッ！

拳の直撃を受け、完全に破碎された。

「残り一機！」

敵機の機動はレーザーに映し出されている。相変わらずレーザー攻撃は続いているが、無視したところで何の問題もない。

「考えが甘過ぎるのよっ！ そんな程度で私と、ゴルバリオンは倒せない！ 平和な世界は渡さない……これで止めよっ！」

マリカの気合に応えるように、鉄機神の背中が大きく開いた。真紅の機体が光を放ち、

(くそ……街を……皆を守れなかった。また……また私は……)

再び少女は悔しげにコンソールを叩く。その音だけがコックピット内に虚しく響いた。

*

「今回も本当にご苦労だったね」

富士山中に隠された基地に戻った鉄機神を一人の男が迎える。縁なし眼鏡に、白衣を身に着けた五十代前半の男——名は氷山正山。鉄機神ゴルバリオンを建造した科学者であり、カントリーに対抗する為に対侵略者部隊「インベード」を組織した人物でもある。

「今回も人々を守ることができた。本当に感謝しているよ」

彼は優しい笑みを浮かべながら、格納庫のゴルバリオンに話しかけてきた。そんな言葉に応えるように、ゆつくりと鉄機神のコックピットハッチが開き、中からヘルメットを被った小柄な少女が姿を現す。

機体と同じ真紅のパイロットスーツ。ピチツとしたスーツが、両腕では掴みきれないほどの胸元を、キュツと引き締まった腰を、ツンツと上向き加減のヒップを艶かしいまでに強調する。女であることを感じさせる身体つき。しかし、ヘルメットが外されたことによって露になったのは、女ではなく少女の顔だった。

肩口で切り揃えられた髪に、吊り上り気味の瞳を持った少女。年の頃は十代後半といったところだろう。その表情は戦果を褒め称える氷山とは対照的に、どこか沈んでいるよう

にも見えた。

「……私は……私には何も守れていません……」

僅かに瞳が潤む。街の惨状を思い返すと、自分で自分が許せなくなりそうだった。

「何をいつてるんだ……それは確かに都心は火の海にされてしまったかも知れない。しかし、君がいなければもつと酷いことになっていたんだ。君は自分を誇つてもいい」

氷山にもそんなマリカの気持ちには分かつているのだろう。優しく頭にポンツと手を置いてくれる。伝わってくる掌の温かさが気持ちよかった。本当にこれでよかったんだという気分にもなれる。

(でも駄目だ……)

甘えてはいけない。

「……皆を守るのが私の存在理由です」

「マリカ……」

震えるほどに拳を強く握り締める。

「私は幼い頃、父と母を目の前で殺されました。理不尽な暴力で……。本当に辛くて、本当に悲しかった。今でも思い出すだけで……」

眦から涙が零れ落ちそうになる。

誰にもあんな想いはして欲しくない。だからこそ――。

マリカは視線を鉄機神の巨体へと向けた。

「施設から氷山司令に引き取られて、この子を操縦する為のイロハをすべて叩き込まれました。それは……皆を守りたいからです」

インベードにはカントリーが次に機動兵器を派遣してくる場所を特定する予知装置がある。これを使い、ゴルバリオンは敵出現前に戦闘ポイントに到着することが可能となっていた。

ただ、先に向かったからといって被害が防げるわけでもない。敵出現のたびに行なわれる大規模攻撃によつて、大小様々な被害が生じているのもまた事実だった。それがたまたまなく許せないのである。

「私をしていることは……私達がやっていることは、すべて無駄なんじゃ——」
パンッ！

氷山の平手が飛んだのはその瞬間だった。乾いた音が鳴り響き、頬に痛みが走る。

「——あ」

「馬鹿やろう！ マリカがそんなことでどうする!! 私は……お前だったら、いや、お前にしかできないと思つたからこそ、お前を鉄機神のパイロットに選んだんだぞ！」

普段物静かな氷山の怒声が、マリカの胸に深く響いた。叩かれた頬が熱い。

「……少し頭を冷やすんだ。お前は……人に褒められる立派なことをしてるんだぞ」

頬を押さえたまま呆然としていると、氷山はこちらに背を向け立ち去っていった。格納庫に少女は一人残される。

「……私は……」

氷山の言葉は何一つ間違つてはいない。それはマリカにもすぐに理解できた。ただ、だからといってすぐに受け入れることは今の少女パイロットにはできなかつた……。

*

数日間、マリカは悶々とした日々を過ごす。部屋から外に出ることはほとんどなく、氷山や基地内の人間と顔を合わせることもなかつた。

(降りるしかないのかな?)

そんなことまで考えてしまう。

勿論今でも人々を守りたい気持ちはある。ただ、目の前で人々が苦しむような光景は二度と見たくなくなつた。そんなものを見るくらいなら、鉄機神から降りたほうがいとすら思う。

ドグオオオンッ!

爆音が突然響き渡り、基地が激しく揺れ動いたのはその時のことだつた。凄まじい揺れに、マリカは寝転がっていたベッドから落下してしまふ。

「ぐ……つつ……な、何? 何が起きたの?」

「……愚かな……」

だというのに、敵の声に動揺はない。嘆息交じりの呟きが少女パイロットの耳に届いた。『本当はこんなことはしたくなかったんだがな』

「な、何をいつて？」

敵の意図が掴めず、動揺を見せてしまう。そんな隙をつくように、黒い機体から幾本ものケーブルのようなものがゴルバリオンに向かって伸びてきた。勿論回避する暇などない。ズボッ！ズボオッ！

機体の大きさに比べ、あまりにも細かいケーブルだったが、簡単に鉄機神の装甲を貫く。こちらの強度まで分析されてしまっていたらしい。

（くっ！ 振り解かないと！）

またウィルスを流し込まれてしまう可能性がある。その意思をレバーを通じて機体へと伝えるのだが、その動きを予見していたかのようにコックピットに異変が起こった。

バキッ！ バキインッ！

コンソールが割れる。同時にコックピット内に敵機が伸ばしたケーブルが侵入してきた。「な、ど、どういうこと!?!」

細長いケーブルは、まるで生き物のようにウネウネと蠢^{うごめ}き、シートに座ったマリカの身体にゆっくりと絡みついてきた。

足首から太股へ、手首から二の腕へと、細身の肢体を締め上げながら上ってくる。
ぐちゅ、ぐじゅう……。

ケーブルの表層は何故か粘着質な液体で覆われており、気色悪い感触がスーツ越しに少女パイロットへと伝わってきた。

「は、はなせっ！ こ、こんなことをして、何のつもりよ!？」

気色悪い触手ケーブルに身体を拘束されていくことに対する恐怖が生まれる。マリカは必死になって絡みつくものから逃れようともがいた。

『……我々は既に鉄機神のエネルギー源も突き止めている。君が機体から降りない以上、申し訳ないがこうするしかないんだよ』

静かな言葉だったが、敵の意図は十分にマリカに伝わる。

鉄機神ゴルバリオンは純潔の乙女にしか動かすことはできない。であるのならはそのパイロットを純潔でなくしてしまえば……。

「い、いやあああつ！」

反射的に悲鳴を上げ、キュッと太股同士を擦りあわせる。同時に身を振り、腕を引っ張った。何としてでもこの状況を脱しなければならぬ。ただし、敵もこちらが逃れようとしてくることくらいは当然予想している。

暴れれば暴れるほど絡みつく蜘蛛の糸のように、ケーブルはマリカの首までするりと縛

り上げてきた。

『大丈夫だ。殺しはしない。安心してくれ』

冷たい一言。それと同時に幾本ものケーブルがマリカのヘルメットを強制的に外してきた。少女の顔が露にされる。すると首元に巻きついていたケーブルが、その先端部をクチュリツとマリカの頬に擦りつけてきた。

冷たい機械の感触。だというのに滑った肌触り。ブツブツと鳥肌が立ってしまった。

『ただ……だからといって君を無罪放免にはできない。それなりに今までの罪を償ってもらう。そうしなければ世論が納得しないからね』

「よろ——んぼっ!？」

一体何をいつているのか？ 疑問を思い浮かべた途端、口腔こうこうにケーブルの先端部が無理矢理挿入された。

冷たく、そして僅かに苦味を伴った感触が広がっていく。内側に巻き込まれていく口唇くちべが外れてしまうのではないかと思うほど、大きく口を開かされることになってしまった。

「んぐっ！ ぶふっ！ ぶごっ！ おごおっ！」

口腔いっぱいに詰まりながら、更に喉奥へと先端を捻ねじ込んでくる。息が詰まり、チカチカと視界が明滅した。操縦桿を握る腕が震える。

（く、くるっし……い、いきつが、いきができなっい……んおっおっおっ！）

ケーブルはこちらの苦しみを嘲笑うかのように、食道にまで先端部をズルリツと押し込む。少女の細い首筋が、内側から膨れ上がった。

「んじゅっ！ ふむっ！ うごっ！ ほごっごほおっ！」

それ以上の侵入を防ぐ為、反射的にマリカは唇を窄め、舌をケーブルの胴体部に巻きつける。ただ、その程度の反抗で蠢く触手を止めることなどはできなかった。それどころか、舌が巻きついたことでケーブルが何故か太さを増す。マリカは知らないけれど、それは口腔奉仕を受けたペニスと同じ反応だった。

『そいつは生体チップで作られた特別製のケーブルだ。君の為に巨額を投じて特注させたものだぞ。たっぷり楽しんでくれ』

男が半笑いで告げてくる。その言葉の中には、今まで散々やられた為か、隠しきれない憎悪が混ざっていた。

ズボジュツズボジュツゾボジュツ！

食道を半分ほど降りたところで、今度は口腔からケーブルが引き抜かれていく。

「んおえっ！ んぶえええっ！」

胸元から吐き気が湧き上がる。唇が外側に捲れ上がり、無様な顔を晒すことになってしまった。

分泌された唾液が溢れ出し、顎をヌラヌラと妖しく濡らす。流れ落ちた液体が、真紅の

ボデイスーツに染み込んでいった。

この程度でケーブルは動きを止めない。半分ほど引き抜かれたかと思うと、間髪入れずに挿入を開始する。止まらないピストン運動の始まりだった。

ボジュッボジュッボジュッボジュッ!

「んもっんもっんもっ! ぶげえっ! うげっ! げぼおっ!」

食道を塞がれるたび、息が詰まり、眦から涙が溢れ出る。口端からは粘液と混ざりあつた唾液が、止まることなく溢れ続けた。

(だ、だっめ! な、何とかし、ないと……い、息ができなくて、し、死んじやう……) 気ばかりが焦ってしまふ。どんな事態にでも対応できるよう、マリカの身体つきに合せて造られた狭いコックピットが、この場合には災いした。

どこにも逃げ場がない。故に玩具のように顔を前後に揺らされることになってしまう。

「ぶぼっ! ど、どまつで! んぶっんぶっぶっぶふっ! むっり! しっむ! しんじやうっ!」

思わず弱音が口をつくが、ケーブルは止まらない。

(け、ケーブル! こ、これっを、これを剥がさないと……)

それでも必死に頭を働かせ、マリカはゴルバリオンを起動させる。機体の腕ならばケーブルを引き剥がすことくらいわけがない。

が、その程度の考えに敵が気付かない筈もなかった。

操縦桿を握る腕への拘束が更に強まる。肌に喰い込んでいくケーブル。その上で二の腕から肩、乳房にまで巻きついていく。ボディスーツの上からでもはつきり分かる豊かな乳房に、黒触手が取りつく。

「んぎっ！ ひっひっひいっ！」

（か、かわつる！ わ、私のお、おっぱい！ ひっ！ か、形変わっちゃうっ！）

乳房に掛かる圧力。柔らかな乳房は容易よういに形を変えていった。ギュツギュツとまるで搾乳でもしているかのように、何度も何度も締め上げてくる。胸の先端部が膨れ上がり、卑猥なまでにパイロットスーツが引つ張られた。

搾られるたびに、痺れるような感覚がマリカを襲う。

（な、何これ？ な、何なの？）

今まで感じたことのないような刺激に、少女は混乱する。知らない感覚が恐ろしかった。このままではいけないと考えるのだが、逃れる術もない。されるがままに口腔を、胸をもてあそ弄ばれる。

数本のケーブルが乳房を捏ね回す。そのたびにマリカの身体はピクッピクッと電流を流されでもしたかのように震えた。

「くひんっ！ ひっひっひんんんっ！」

「な、何を……あつあつ……い、いって……え？」

敵の言葉が持つ意味を理解できず首を捻った瞬間、唐突にモニター画面に新たな映像が映し出された。それは街の光景。大勢の人々が街頭スクリーンを見つめている映像だった。そしてスクリーンに映し出されているのは……。

「う、嘘！ 嘘よおおおっ！」

今まさに颯られ、陵辱されているマリカの姿だった。しかも、人々はただその光景を見つめているだけではない。口元に浮かぶのは冷笑。瞳に浮かぶのは軽蔑の眼差しだった。

「ほら、やっぱり思ったとおり。最低の人間じゃん」

『淫乱ってレベルじゃねーぞ！』

『しかし胸はでけーな。やっぱオッパイミサイル撃てるのか？』

ゲラゲラと嘲笑する言葉が耳に届く。誰も鉄機神が敗れたという事実にはショックを受けていないようだった。寧ろ犯されるマリカの姿を喜んでいる。

「な、なんつで？ 何でよおっ?! んあつ！ お、く、おっく叩かないでえっ！」

分からない。どうして？ 何故？ 思考が混乱する。最後の力を振り絞ってでも、敵を倒そうという決意が霧散してしまう。そんな隙をつくように、蠢く黒触手が何度も蜜壺を叩いてきた。

じゅぽっじゅぽっじゅぽっ！

「ひっひっひやあああつ！ んだつめえ！ みられつてるのに、いやつやあああつ！」
 膣奥を先端でノックされるたび、肢体は官能の渦に飲み込まれる。淫悦の疼きが、全身を支配していくようだった。幸福感さえ覚えてしまうような悦びに、少女パイロットは自然と腰を振ってしまふ。自らケーブルに腰を押しつける様は、発情した獣のようにさえ見えた。そんな光景に、人々が更に笑い声を上げる。

『うわっ！ すげえもの見た。最悪』

『何かいろいろな汁出すぎ。舐めてみてえ』

自分達の守護者がやられているというのに、人々はまるで気にしていない。それどころか、マリカの痴態を本当に楽しんでるようにさえ見えた。

「みにやいで！ こんなのみにやいでえっ！ ひっひっひんんんっ！」

脳髓を溶かすような快樂が身を襲う。マリカにできることなど何もなかった。愉悅を含んだ嬌声きょうせいを上げ続けるしかない。心が砕け散りそうだった。守るべきものなど何もない。誰も救いなど求めていないのではないか？ 大きく心が揺らぐ。

（違う。負けない！ 負け、な——いのおっ！）

それでも必死に意志を強く持ち続けようとする。だが、そんな心を嘲笑うかのように、肉体は与えられる快樂に悦びの悲鳴を上げていた。

肉壁が収縮し、挿入される触手から子種を吸い取ろうとする。女としての本能が、止ま

ることのない肉悦に溺れていた。

「だつめ！ くつる！ 腔中なかから何か来るうっ！ あっあっあっあぁあぁあっ！」

ズクンツと腔奥が震える。子宮口が下がり、挿入された先端部に喰いついた。パクパクと腔内肉孔が開き、黒触手をキュツと締め上げる。新たな刺激に生体ケーブルは過敏に反応し、ビクビクツと震え、そして――。

びゅぶぽっ！ どびゅぽっどびゅぽっどびゅぽっ！

「んくひあああつ！ は、はいつて、はいつてくつる！ な、腔中なかで、腔中なかで射精でてるっ！ お、おっおっおっ！ ふ、ふるえってる！ ま、マ○コの中で震えてるうっ！」

多量の熱液を蜜壺の中に吐き出した。

下腹部に生温かい感触が広がっていく。肉壁に染み込む汚液のぬめりが、後一步のところで耐えていた肉体を一気に押し上げる。クルリツと瞳が裏返し、

「いっぐ！ だめ、いぐの――いぐのとめられなひいっ！ ひっひっひぐうっ！」

少女パイロットは達した。

全身を蕩とろかすような愉悦の中に、身体が、心が沈んでいく。腔口からは愛液と、白濁液が混ざりあつた汁がプシヤツと噴き出した。

「……あ……あぁあぁ……」

身体中を脱力感が包み込む。ヒクヒクと全身が痙攣していた。半開きになった口から漏

れる吐息が、少女の身に刻み込まれた快楽の強さを思い知らせる。

（私……私は……）

「た、たしゆけ……たしゆけて……司令……たしゆけてえ……」

心は擦り切れてしまった。守らなければならぬものも奪われてしまった……。

最早氷山に助けを求めることしかマリカにはできなかつた。弱々しい声で、必死に救いを求め続ける。

だが、そんな彼女を嘲笑うように、未だ黒触手が挿入されたままの腔内に新たなケーブルが侵入してきた。

ぶじゆぽっ！　じゆずぽおっ！

「ほぎっ！　ひっひっひきいっ！　や、やぶれっる！　身体、身体が破れるうっ！」

身体が二つに引き裂かれそうになる。再び圧迫された膀胱から、小便が大量に溢れた。それだけでは終わらない。更に蠢く触手が肛門に、口腔にと入り込んできた。

「んぼっ！　んぼおっ！　んいいいいっ！　ぶべえっ！」

嬲られる少女の姿に興奮でもしていたかのように、すぐにケーブルは射精を始める。口腔が、直腸が、蜜壺が——身体中が白濁液に濡れる。

どぶしゃっ！　ぶしゃっ！　ぶしゃあああっ！

赤いパイロットスーツが白く穢れていった。髪にもベッタリと染み込む。スーツの中に

も触手が潜り込み、やはりここでも射精が行なわれた。

スーツが内側からブクリッと膨らむ。

(あつ、あちゅい……身体中があちゅひい……や、まだ、までやおわりやないっ！)

人と違ってケーブルに限界はないようだった。射精は止まることなく、少女の外と内を穢し続ける。

「しつり！ 尻が、マ○コが！ いっぱ、いっぱいひなつのおっ！ んべっ！ ひへえっ！」
 まるで汚液のパックでもされたかのように、美しい顔も粘液に塗れていた。時折口や鼻から汁が飛び散る様が情けない。何の抵抗もできず、ただひたすら汚される姿がそこにあった。

締めつけられる乳房。脇の下でもケーブルが蠢く。ギシギシと身体中に触手が喰い込み、細身の身体が悲鳴を上げる。が、その苦しみさえも、少女の肢体は快楽へと変換していく。締め上げられれば締め上げられるほど、心地好い淫悦がマリカの心に広がっていった。

「あーあーあーあーあー」

馬鹿みたいに嬌声を上げ続ける。散々飲まされた白濁液が逆流し、ポコポコと泡を吹いているようにさえ見えた。

シャワーのように降り注ぎ続ける白濁液の奔流の中に、マリカの身体は沈んでいく……。

*

「んぼっ！ んぼえっ！ ぶえっ！ ぶええええっ！」

息ができない。酸素を求めて口を広げても、流れ込んでくるのは白濁液だけだった。コックピットそのものが白濁液の中に沈んでいる。この状況でできることなど何もなかった。

スーツの持つ特殊生存維持装置のお陰で、生かされてはいるものの、思考能力などほとんど残っていない。

んごっんごっんごっ！

（ああ、苦い……にがひよお……）

無意識のまま、酸素を得る為に少女パイロットは白濁液を飲み続けた。

（しゅくうんだ……まもりゆんだ……みんなやを……みんなやをお……）

犯されながら、白濁液を飲みながら、それでも少女は人々を想う。想いながら、愉悅に身を晒し続けた。

白濁の海の中で腰を振る。未だに蠢く触手に膺壁を擦られると、どうしようもなく気持ちよかった。

（い……いいい……きもひいい……あつあつあつ！ まもりゆのきもひいいいっ！）

自分が何をしているのかも分からない。ただ、操縦桿を握ったままの腕は前後に動き続ける。鉄機神を操縦しているかのように。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>